

HP管理者何某

思い返してみると私は量産型良い子だった。反抗期を表に出さず、地域のクリーンデーに参加し、偉いねと褒められるとそんなことはありませんよと返す。だが優等生や堅物委員長気質だったかと言うとそうでもなく、成績はまあまあ、クラスを巻き込む悪ノリは止めない。良い子と言いつつには型落ち気味で、提出物の期限はあんまり守れなかったり、遅刻という概念と仲が良かったりした。要するに小学生の頃はクラスで一番の頭の良さで、それが朱に交わりつつ、自分は天才なのだ、やればできるがやる気が出ないのだという意味の分からない自尊心が歪に成長していった結果、自分を孤高の天才だと勘違いしている天災的陰キヤが爆誕した、というわけだ。

委員会でも要職を務めて自分には人をまとめる才があるのだと自負して大学受験を迎えたが、成績が良くないので面接というそれを自慢する機会は得られずじまいだった。センター試験では今までのどんな模試よりも高得点を出した——羽の生えたふざけたリンゴの加護だろう——ことで、国立前期への道を閉ざされずに済んだ。その国立大は記述が重く、社会科目に至っては四百字の質問も書かされるところだったため、ずっと記述の練習をしていた。

あれはたぶん、国立前期試験の三日か四日前の事だったと思う。根拠もなく無尽蔵に湧いていたはずの自信が突然に枯渇をはじめ、睡眠を削ってでもとにかく机に座っていないと安心できないようになり、かのナポレオンの如きショートスリーパー生活を実践する気になってしばらくの頃だった。

もう受験直前だ。部屋の壁には好きなキャラクターのイラストを張り、好きな音楽を流し、いろいろな本と睨

めつこをしながら、午前3時34分少し前にツイッターを開くのを楽しみしつつつ夜を明かす。そんな日々が続いていたが、その日はどうも、いつにもまして集中力が足りない。いつもであれば、それでも雀の涙くらいはあらずなのに、その日ばかりはミジンの涙くらいもなかった。2時くらいで集中力が途切れ、グタグタしたまま3時になりかけていた。

その時、ふと一つの邪念が浮かんだ。小さなころにニコ動で流行っていた曲を借りれば、『さあ、親が寝たから何でもやりたい放題。そうだコンビニ行こうかな』と言ったものである。私の部屋は親の寝室とは離れた玄関寄りの位置にあったため、大きな音を立てさえしなければ外に出ることができた。それを利用して外出、駅前まで歩いて、コンビニに行こうという魂胆だった。

これを邪念と形容したのは、別に勉強に集中していない発想だったからではない。それどころか、コンビニでは眠眠打破を買うつもりだったのだから、むしろ必要なことだと思っていた節すらあった。ではなぜそれは邪念だったのか。やったことがなかったからだ。単純にこんな遅くに外に出たことはなかったし、もつと言えばこんなに露見したら親に怒られそうなることをしたことがそうそうなかったのだ。

親は今思えば過保護だった。基本的にゲームや漫画には寛容だったが、外出とか生活面ではかなり過保護、悪く言えば自由がなかった。中3になって初めて一人で電車に乗ることを許されたし、21時半以降も起きていて良いようになったのは中1の時で、しかも最初は前日までの事前申請制だった。大学生になった今でも、おちおち友達と遠くに遊びに行くこともままならない。泊まりや徹カラなど、1年のうちに一回でも許可が出れば良い

方だ。というか、友達の家にお泊まりに行ったこと自体小学生のころから今に至るまで一度もない。今後も一人暮らしするまでそんな許可が出ることは無いだろうから、もし必要なときは合宿とか実地研修とか言っただけで誤魔化すことになるだろう。

時間はあるとは言えない。素早く着替え、コートを着込み、財布筆頭に必要なものをポッケにねじ込み、いざ出陣と玄関に乗り込むがごとく向かう。

ドアの蝶番がギギと音を立てたのには肝が冷えた。今度暇なときに潤滑油でギトギトにしてやるから覚悟していろよ、と心の中で詰った。

お目当てのコンビニまでは遊歩道が整備されている。なだらかな下り坂の遊歩道は団地や中学校や保育園の間を通って駅の方向へ伸びていて、普段であれば園児連れから後期高齢者まで、自転車からオートの手椅子まで往來するのだが、さすがに夜の27時ともなると誰もいなかった。代わりに道を通るのは夜風だった。二月とはいえ、きつと感覚が研ぎ澄まされていたのだと思う、意外と虫の声も聞こえてくるのだ。秋の夜長を鳴き通せるのだから、冬の夜長を鳴き通すこともできるのだと喚んでいた。

駅が近くなると14階建のテナントビルの脇を通らねばならない。このテナントビルは駅前では最も高い建物の一つで、来た道からもよく見える。上の方は深夜どころの時間ではないにも拘らず、いくつもの窓からは煌々とした光が漏れていた。

もう建てられて30年弱かそこらになる。要するにそろそろカタが来ていて、昼に前を通ると補修工事をして

いることがあった。一般的に世の工事は年末に集中する感があるが、年末は過ぎ年度末というにはまだ少し気が早い二月の中旬、それも人の寝静まる寄りという事で、工事をやっているとはサラサラ思っていないが、バルに付属する3階建の低層棟と繋がる屋根付き通路の方向に人が見えた。ここはいつもならビル風があまりにも強い地帯なはずなのだが、この夜は運よく静かだったので、立ち止まってそちらの方を見やる。青い服を着た三人の男たちがそこにはいて、脚立に乗り天井に手を伸ばすのが一人、脚立を抑えて天井を向くのが一人、手に取ってあるボードに何か書き込むのが一人。どうやら照明に不備がないかチェックする人たちだったようだ。そのような人たちを見るのは初めてで、衝撃だった。この時間帯に外に出るのが初めてだから当然と言えば当然なのだが、もつといえは深夜にお仕事をしているその瞬間をこの目で見ることが初めてだったのだ。

その姿を見て、私は初めて24時を越えて起きていた日の事を思い出していた。徹夜した日ではない。大晦日以外で日付が変わるまで起きていたこともまた、中学一年生までなかった。24時という時間に何か特別なものを感じていた頃だ。小人でも来るんじゃないかと、24時を境になにか世界が変わるんじゃないかと、そんなことを考えていたのを覚えている。だから壁掛けの電波時計と睨めっこをしながら目を跨いで、案外つまらなかつたな、とそのまま寝た。

こんな深夜になってさえも、仕事をしている人がいるというのは、繰り返すが衝撃的なことだった。初めて実在を確認したその時になって、私はやはりどうしても夜というものに何か特別な感情を抱いていることを理解した。流石に小人がいるとは思っていなかったし、世界が

変わるわけでもないのだが、それでも裏世界に行ったかのような感覚をこれまでの道で抱いてきたことも含めて、どうも夜というものが高校三年生の陰ギャにとっては聖域、あるいは未知不可知なものというふうに見えていたらしかった。

何分か照明調査団の仕事ぶりを見守っていたが、彼らが角度的に見えない方へ行ってしまったからコンビニへと足を向け直す。はじめての深夜コンビニはもう目前である。牛乳瓶のロゴをした水色のコンビニの明かりがついに見えてきた。

当然の如く深夜コンビニも初めてであった。従業員は誰もレジにいない。おやと思っただけでお菓子コーナーの前で品出しをしていた。アルバイトと思いき若い男だったが手さばきは良く、思わず見ると相手に気付かれる。お菓子コーナーから何か買うのかと思われてそそくさと立ち去られてしまっただけで、悪い気がして買う予定になかったチョコレートを買う。それ以外に買うべきものは眠眠打破しかなかったが、ちよつとコストパフォーマンスがよろしくなかったのでメガシヤキにした。品出しを続ける店員に声をかけてレジを済ます。やはり一人しかいなかったようで、帰り際に誰にも聞こえない小声で頑張ってくださいと言う。

今思えば大したことでもない。当時の自分には精一杯の非行だったが、かわいいかわいいはじめてのおつかいレベルに過ぎない冒険だった。

ただ少なくとも、あの夜、玄関の扉を開けた時に、夜の世界、ただ時間的な夜でない夜の世界の扉をも開けたことは、それは紛れもない事実だったのである。